

7 古代における瀉血

藤倉 一郎

古代バビロニア、古代エジプト、および古代インド医学のすべてにおいて、瀉血が行われていたと考えられているが、必ずしも確証がない。また瀉血がどうして行われるようになったかについても不明である。

古代ギリシャのアスクレピアデス神殿で行われていた医療では、僧侶の神託によって、下剤、温泉療法、運動などとともなう瀉血が行われていたと考えられる。ヒポクラテスも激烈な炎症に瀉血は有効であるとし、まれに行われていたと伝えられている。コース派のディオクレスはヒポクラテスと殆ど同じ治療法を行ったが、その弟子プラクサゴラスは扁桃炎に浣腸、発汗、瀉血をしたり、利尿剤や吐剤を用いるなど激しい治療法を行った。クニードス派のクリシッポスは解剖学者として優れていた

が、瀉血、下剤をもちいていない。プラトンの弟子アリストテレスは解剖学、生理学、胎生学にすぐれた治療法に瀉血を勧めている。アレキサンドリヤ医学の中でヘロフィロスはプラクサゴラスやクリシッポスについて医学を修め解剖学に功績がある。液体病理説を支持して瀉血を行い、薬物療法を行った。ヘロフィロスとならんでエラストラトスはすぐれた解剖学者で病理解剖をして、肝硬変と浮腫の関係をしらべたり、空気は肺静脈より左心室に入り、心臓の拍動で全身に配分されるとした。固体病理説を主張して、過多の養液が脈管にあふれ、血液は多数の血管吻合の路を通って動脈に進入すると、プノイマの働きが妨げられる。そこに炎症がおこると考えた。食養法、緩下剤、浣腸、利尿剤、沐浴、運動などを処方した。そして瀉血は極度に制限した。エラストラトス派は二世紀頃まで存続しヒポクラテス崇拝派と抗争を続けた。アスクレピアデスはローマにあつて、晩期のヒポクラテス派が、ヒポクラテスに名をかりて経験のもとづくとして行った下剤、吐剤をしりぞけ、規律的な食養法、理学的療法を創始した。エラストラトスの思想

をついだが、瀉血は僅かに行い散歩、運動、乗馬をすすめた。アスクレピアデスの高弟テミソンは医学の思想、技術を厳密に規定あてはめて、単純化、方法化しようとする方法学派を創立させ、従来の液体病理学説を否定した。食養法、新陳代謝療法などの全身療法を主として瀉血や吐剤、下剤などの排泄療法を制限した。テミソンの方法学派はテッサロスに引き継がれて、ローマ帝政時代最も人気があった。方法学派のなかには婦人科領域の大家ソラノスがいる。彼は急性および慢性疾患論をだし、小児科医療にもすぐれていた。視診、触診、聴診を行い、瀉血もしている。

ケルススによれば、古代ローマの医学では、瀉血、吸角、下剤、吐剤、マッサージなどがおこなわれており、瀉血をしてはならない病気は殆どないとのべている。ケルススの同時代、アテナイオスはプノイマ学派をおこした。薬剤を用いず食養法、物理療法を多用した。プノイマ学派のヘロドトース、アルキゲネス、アレタイオス、アンティロスも瀉血を多用している。とりわけアンティロスは外科医で治療学、外科学を著し瀉血法を詳述して

いる。ガレノスはこの古代ローマにヒポクラテスよりも数段すぐれた解剖学知識をもって登場した。生命精气は脳にいつて靈的精気となり全身に送られるという精气システムを構築し、これにヒポクラテスの体液病理学説をとりいれて、過剰な血液を排除する目的で瀉血を主張したのである。瀉血についてのエラシストラトースにたいする討論にこのあたりの様子が伺われる。彼の強烈な瀉血支持論が十九世紀までその命脈を保たせたと考えられる。

(医療法人一期会藤倉病院)